氏　　名	水　本　深　喜
学位(専攻分野)	博士（心理学）
学 位 記 番 号	博心甲　第５号
学位授与の日付	2013年９月28日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	成人生成期女性の母親との関係の発達的推移 ―精神的自立過程における親密性の役割に着目して―
論 文 審 査 委 員	主　査　教　授　　山　根　律　子 副　査　教　授　　平　山　栄　治 副　査　教　授　　遠　藤　健　治 副　査　広島大学教授 杉　村　和　美

論 文 の 内 容 の 要 旨

水　本　深　喜

【本研究の目的と意義】

現代の先進国における、高学歴化、晩婚・非婚化等の社会的要因により、青年期から成人期への移行期は長期化し、「成人生成期」（Arnett, 2000）と呼ばれるほどに独特の様相を呈している。自立を重視する欧米の心理学の領域や、社会学の領域（「ポスト青年期」「パラサイトシングル」など）では、子の自立不全への危機感から、こうした時期の出現が着目されているが、我が国の心理学の領域では、この新しい発達の時期の特殊性を扱った研究はほとんどなされていない。年齢的・身体的には成人しながらも自立していない時期が長期化する中、子は親とどのような関係にあり、どのように自立へと向かっているのであろうか。「自立」という側面から親子関係を見ると、青年期から成人期にかけての親からの精神的自立について、これまでの我が国の研究では、思春期的葛藤や親との対立を経て親から心理的に分離し、独自の自己を築くことが指標とされてきた（加藤・高木、1990など）。しかし、親との関係は、自立によって途切れてしまうのではなく生涯継続するものであると考えると、成人生成期

における親との関係性の変化は、親との間に互いに成熟した大人の個として認め合う「対等な関係」（落合・佐藤、1996；White, Spiesman & Costos, 1983）を築くプロセスと捉えられるであろう。こうした自立のプロセスには、性差が指摘される。親との間に距離を置くようにして親から分離・独立し、自己を確立して行くという男性モデルの自立とは異なり、女性モデルの自立では、親、特に母親との親密さが維持され、母親との「関係性の中で自己を築く」（Miller, 1986　河野訳　1989）という独特なプロセスが主張される。

ここで、このように自立においてその関係性がとりわけ重要な役割を持つとされ、近年特にその親密化が指摘される母娘関係に着目する。母娘関係は、共同性を重視し家庭役割を継承する女性同士として、従来親密であるとされてきた。加えて近年の少子化、長男相続制の崩壊、晩婚化を背景として、母娘関係は現代の我が国において「一卵性母娘」（柏木、1998）と言われるほどに「密着」していると指摘される。現代の成人生成期女性における母親との関係を前世代（母親の20歳の頃）と比較した研究でも、現代の娘は母親に対し、より依存的・親和的になっていることが指摘されている（水本、2010[1]）。しかし、「自立」という側面から母親との関係をみると、娘は前世代同様に母親から心理的に分離しており、そうした中で母親との関係における両価的葛藤は高まっていた（水本、2010）。すなわち、母娘関係が親密化する現代において自立するプロセスで、娘の葛藤は高まっていると推測される。臨床心理学の視点からも、母娘関係の親密さが、自立を意識した娘に葛藤を生起させることが強調されている（信田、2008；斎藤、2008）。しかし、この母親との親密さには、こうしたネガティブな意味のみではなく、従来発達研究で指摘されるように子の自立的発達を支える（Steinberg & Silverberg, 1986）というポジティブな意味もあるだろう。これらのことからは、娘における母親との「親密さ」といったものは、自立期の娘の発達に密接にかかわる重要なものであると推測されるが、その親密さはこれまで距離の近さといった意味合いで一括りにされ、どのような親密さがどのように作用して娘に葛藤を生じさせたり娘の自立を支えたりするのかは、詳細に検討されて来なかった。母娘関係が親密化し、自立期が延長している現代において、その親密さの自立への影響はより顕著になっていると推測され、こうした視点から見た母親との関係の発達的推移は、現代女性の生涯発達の特徴が見られる重要な側面であると考えられる。

---

[1] 水本深喜（2010）．青年期から成人期への移行期における母娘関係の世代間変化と世代間伝達 家族心理学研究、24、103-115. に掲載された。

以上の問題を踏まえ、本研究では、近年殊に親密化しているとされる母娘関係に焦点を当て、娘の精神的自立過程における親密性の役割に着目し、母親との親密性と精神的自立のダイナミクスを母娘関係の発達的推移のプロセスに関連付けて検討した。その際に、本研究では、量的分析で得られた結果を質的分析で解釈・説明する「順次的説明的デザインによるミックス法」を用いた。この方法をとることにより、量的分析を基礎とした上で、母親との親密性と精神的自立のダイナミクスと言う視点から見た母娘関係の発達的推移がどのような心の動きによって生じるのかについて、より詳細に吟味することができると考えられた。

【論文の概要】

本論文は、５部構成である。

第Ⅰ部では、本研究の問題、方法論的立場、ならびに研究の構成を示した。

第Ⅱ部　親密性の精神的自立への関わり

第Ⅱ部では、母親への親密性が母親からの精神的自立にどのような影響を与えるのかについて、質問紙調査で収集した量的データを分析することによって明らかにすることを目的とした。この際に、第１研究では既存の尺度を用い、母親との親密さと精神的自立は、精神的適応にどのように関連しているのかを検討した。その結果既存の尺度では不十分であることが明らかになった点を踏まえ、第２研究では精神的自立を測定するための尺度を、第３研究では母親との親密さを測定するための尺度を作成した。そして、それらの尺度を用い、第４研究では母親への親密さが精神的自立にどのように関わっているのかを明らかにした。以降、対象者は、高学歴化、晩婚・非婚化が進み、自立期の長期化と母娘関係の親密化の影響が強く生じると予測され、我が国の動向がいち早くみられる地域にある、首都圏の大学に通う未婚女性とした。

（第１研究　母親との親密さと精神的自立の、精神的適応との関係）[2]

母親との親密さは、自立期の娘に葛藤を生起させていると指摘されるため、母親との親密さの自立への影響について検討するにあたっては、「精神的適応」という要因を含めた検討が必要であると考えられた。そこで第１研究では、娘が母親に向ける親

[2] 水本深喜・山根律子（2010）．青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から　発達心理学研究、21、254-265. に掲載された。

密さについて互いの距離の近さという側面を取り上げ、成人生成期の女性における母親との「距離の近さ」および「精神的自立」が、娘の「精神的適応」にどのように関わっているのかを検討した。その結果、「精神的自立」と「精神的適応」との関連は、「心理的分離」の高さにはみられず、母親との「信頼関係」の高さにみられた。一方、母親との「距離の近さ」においては、精神的に近く「自己統制感」が高い関係にあると、娘の「精神的適応」は高いことが示された。

（第２研究　「母子関係における精神的自立尺度」の作成）[3]

第１研究の結果からは、精神的な適応感も含めて成人生成期の娘の自立のプロセスを検討するためには、母親からの心理的分離のみでなく、母親との信頼関係を測定することができる尺度の作成が必要であると考えられた。そこで第２研究では、成人生成期における適応的な発達としての母親からの精神的自立について、「信頼関係」と「心理的分離」を構成概念と想定して尺度項目を作成し、「母子関係における精神的自立尺度」を作成した。分析の結果、得られた下位尺度である自立の２側面の内、「信頼関係」は自信や精神的安定性と、「心理的分離」は独立傾向と関連するものであった。そして、母親から心理的に分離し、母親との信頼関係を築いている娘は、母親との対等感をより抱いていた。これらの結果から、「信頼関係」と「心理的分離」により、親から心理的に分離して互いに信頼し合う対等な関係を築くという成人生成期の娘の適応的な精神的自立を捉えることができると確認された。

（第３研究　『母親への親密性尺度』の作成）

母親との親密さは、その有り様によって自立期の娘に与える影響が異なると考えられたが、その多様性を捉えた研究は見られなかった。そこで第３研究では、親への接近欲求に基づいて親に持つ親愛的情緒を親密性とし、『母親への親密性尺度』を作成した（以下、親密性は『　』で括る）。尺度項目は、成人生成期の発達的推移を見るための視点として重要と考えられる「親から子へ」から「子から親へ」という「愛情の方向」の変化（平木、1997）および第１研究の結果で自立期の娘の精神的適応と関連することが示された「自己統制感」の高さを捉えることができるように作成した。

---

[3] 水本深喜・山根律子（2011）．青年期から成人期への移行期における母娘関係：「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の４類型モデル」の検討　教育心理学研究 59、462-473.　に掲載された。

３つの下位尺度の構成概念妥当性を検討すると、『心づかい』は母親に愛情を与える方向で、自信や精神的安定性、主体性の高さと関連することが示された。一方、『捉われ』と『絶対的安心感』は母親に依存的な（高橋、1973）親密性であり、『捉われ』には主体性や自律性、自信の低さとの関連が、『絶対的安心感』には自信や主体性の高さとの関連がみられた。

（第４研究　母親との親密性の精神的自立への関わり）

作成した２つの尺度を用い、第４研究では、３つの親密性（第３研究）が精神的自立の２側面（第２研究）にどのような影響を与えているのかを検討した（「母娘関係の親密・自立モデル」）。分析結果からは、母親に『心づかい』を向けることは、娘の精神的自立を促していると考えられた。一方で、『捉われ』と『絶対的安心感』の高さは、「心理的分離」を抑制することが示唆された。さらに、この２種の親密性の相違が「信頼関係」への関わりに見られ、『絶対的安心感』の高さは「信頼関係」の構築を促し、『捉われ』の高さは「信頼関係」の構築を抑制すると考えられた。

第Ⅲ部　母娘関係の発達的推移

第Ⅱ部で示された「精神的自立」と『親密性』という側面から見た母娘関係は、どのように発達的に推移するのであろうか。第Ⅲ部では、従来の研究では明らかになっていなかった成人生成期の女性の母親との関係の発達的推移について、これらの側面から明らかにすることを目的とした。その際に、第５研究では、「精神的自立」と『親密性』という側面からみた母親との関係が、成人生成期を通してどのように発達的に推移するのかを成人生成期前期と後期を比較する横断研究により検討し、第６研究では、精神的自立のプロセスを縦断研究で検討した。いずれも、量的データを分析した。

（第５研究　横断研究による発達的推移の検討：成人生成期前期と後期の比較）

第５研究では、成人生成期前期と後期を比較する横断研究を行い、成人生成期を通して母娘関係がどのように発達的に推移するのかを検討した。その結果、娘は、成人生成期を通して「信頼関係」を高め、より「心理的に分離」して精神的に自立すると考えられた。一方、親密性では、成人生成期を通して、『心づかい』は高まるが、『捉われ』『絶対的安心感』は低下しないと考えられた。

（第６研究　縦断研究による精神的自立のプロセスの検討）

第６研究では、１年の間を置いた縦断調査を行い、成人生成期の娘が精神的に自立するプロセスを検討した[4]。その結果、自立のプロセスは一様ではなかった。母親との信頼関係が高い群では、その信頼関係の高さを維持したまま心理的に分離すると考えられた。こうした発達のルートをたどった群の精神的適応は高かった。以下、これを「第Ⅰの精神的自立のプロセス」とする。一方で、母親との信頼関係が低い群では、信頼関係が低いまま心理的に分離し、その後に信頼関係を高めていくルートをたどると考えられた。この群では、比較的適応が低いことが示された。以下、これを「第Ⅱの精神的自立のプロセス」とし、これらのプロセスを「２つの精神的自立のプロセス」とする。

第Ⅳ部　親密性と精神的自立のダイナミクスによる母娘関係の発達的推移

第Ⅳ部では、第Ⅲ部の量的な実証研究で示した「２つの精神的自立のプロセス」が、娘の内面におけるどのような心の変化によって生じたものなのかについて、その変化の過程を検討した。そしてこれにより、親密性と精神的自立のダイナミクスにより母娘関係の発達的推移のプロセスを解明するための仮説を生成することを目的とした。PAC 分析を用いた面接調査[5]に基づき、第７研究第１分析では、娘はどのように精神的に自立しているのか（第２研究と関連）を検討し、第２分析では、３つの親密性が、精神的自立をどのように促進したり抑制したりしているのか（第３、第４研究と関連）を検討した。これらの結果を踏まえ、第３分析では、「２つの精神的自立のプロセス」に親密性がどのように関わっているのかを検討し、対等感の獲得過程、自立に向けた葛藤解消のあり様を中心に、２つの精神的自立のプロセスがいかにして生じるのかについての仮説を生成した。

---

[4] 母娘関係を「信頼関係」の高低、「心理的分離」の高低の組み合わせから類型化した「母子関係の４類型」を用い、類型の経年推移を検討する方法をとった。

[5] 分析対象者には「母子関係における精神的自立尺度」および『母親への親密性尺度』を実施し、各下位尺度得点の値が顕著であった娘達をプロトタイプとして理論的にサンプリングした。PAC 分析で用いた刺激文は、「『あなたとあなたのお母さんとの関係』について、どのような言葉やイメージが『意味あるもの、または重要なもの』として浮かんできますか？」であった。分析で得られたクラスターから「信頼関係」「心理的分離」および『捉われ』『絶対的安心感』『心づかい』に分類されるものを抽出し、各プロトタイプの量的データにおける相違と類似を、質的データにおける相違と類似に関連付けて検討した。

（第７研究　親密性と精神的自立のダイナミクスによる母娘関係の発達的推移）

第１分析では、PAC 分析で得られた「精神的自立」に関するクラスターについて、類似した心情を示すものをまとめてカテゴリー化し、その心情を表すよう各カテゴリーに命名した。その結果、母親からの心理的分離については、母親との距離を拡大することにより母親と分離して行く様子がみられるカテゴリーと、距離の拡大を伴わずに分離する様子がみられるカテゴリーが認められた。さらに、自立のプロセスで築かれる対等感は、母親からの信頼感と関連して「信頼関係」に反映され、母親と相互に信頼し合う対等な関係が築かれたという語りがみられるカテゴリーと、母親からは対等な存在と認められなくとも母親から信頼されうる存在になったという自信の高まりが示されるカテゴリーがみられた。

第２分析では、PAC 分析で得られた『親密性』に関するクラスターについて、「精神的自立」に分類されたクラスターとの結節の形状と娘の語りから、「精神的自立」への作用を読み取りカテゴリー化し、その作用を表すよう命名した。その結果、全てのプロトタイプにおいて、母親との３つの親密性それぞれが、自立して行く娘の支えとなっている様子が認められた。また、母親から支えられる関係が依存であるという「気づき」の生起を示すカテゴリーがみられ、自立欲求を高めていると考えられた。しかしその一方で、そうした関係からの離れ難さを示すカテゴリーも抽出され、分離を抑制するよう作用している様子がみられた。このように、３つの親密性には、娘の自立を抑制・促進する側面が併存すると考えられた。

第１分析、第２分析で得られた結果を踏まえ、第３分析では、個人内で親密性が精神的自立にどのように作用し、関係性が経年的にどのように変化しているのかを分析し、親密性と精神的自立のダイナミクスにより母娘関係の発達的推移のプロセスを解明するための仮説の生成を試みた[6]。母親との対等感獲得過程を検討すると、娘が母親に『心づかい』を向け、愛情を「与える」存在になり得るという自信を持つことは、娘の対等感を高めるよう働く様子が見られた。そして母親への『絶対的安心感』が高く、「信頼関係」の高さを維持したまま心理的に分離する「第Ⅰの精神的自立のプロ

[6] 具体的には、２つの精神的自立のプロセスおよび親密性の発達的推移（第Ⅲ部）から母娘関係の発達プロセスを予測し、第１、第２分析対象者の中から母娘関係の発達変化が顕著に見られると考えられた娘達をプロトタイプとしてサンプリングした。各対象者の個人内でのクラスター結節の形状から親密性の精神的自立への作用を図示し、その図から関係性のダイナミクスの経年変化を読み取った。そしてそれらを２つの精神的自立のプロセスに位置付けながら、母娘関係の発達的推移のプロセスを解明するための仮説を生成した。

セス」をたどると考えられたプロトタイプでは、相互の信頼関係を基盤とした相互的対等感が育まれる様子がみられた。一方、『絶対的安心感』が低く、「信頼関係」が低いまま心理的に分離する「第Ⅱの精神的自立のプロセス」をたどると考えられたプロトタイプでは、娘は母親との間に距離を置き、母親以外の他者との関係の中で自己を築き、自信を高めながら自立する様子が認められたが、得られた対等感は、娘の一方的なものである様子がみられた。これらのプロセスには、葛藤解消のプロセスの関与も認められた。すなわち、娘達の語りからは、前者のプロセスでは、自立欲求の高まりと、母親との間に維持され育まれる親密性による母親からの「離れ難さ」との間の葛藤解消において、娘は母親との密着的関係を否定するのではなく、その関係を成熟させていくことにより、自立的に発達することが示唆された。このプロセスでは、娘が母親に自立欲求を伝えることで、母親の変化を引き出している様子もみられた。一方、後者のプロセスにおける、母親への情緒的欲求が満たされないことによる葛藤は、母親と距離を取ることで解消が試みられたが、その葛藤が解消されることは難しく、潜在化されるにとどまる様子が見られた。

第Ⅴ部　総合考察

本研究では、成人生成期女性の母親との関係の発達的推移を、精神的自立過程における親密性の役割に着目して検討した。生涯継続する親子関係における自立の概念を構成するものとして、従来指標とされてきた親からの「心理的分離」に、親との「信頼関係」を加え、これらの２側面により、母親から心理的に分離し、互いに信頼し合う対等な関係を築くという成人生成期の娘の精神的自立のプロセスを捉えた。この精神的自立の２側面からみた自立のプロセスには、母親との信頼関係の高さを維持したまま心理的に分離して行く精神的適応が高い道筋と、母親との信頼関係が低いものが、心理的分離を経た後に母親との信頼関係を高めていく比較的精神的適応が低い道筋という、２つのプロセスがあると考えられた。

一方、近年親密化していると指摘される母親との関係について、質的に異なる３つの親密性から検討すると、「密着」とされる親密性の高さは、母親に愛情を与える方向の親密性である『心づかい』が発達とともに高まる一方で、母親の価値観に『捉われ』ていたり母親に『絶対的安心感』を抱いていたりといった、母親に依存的な親密性が維持されることで形成されていた。娘の語りを見ると、母親との関係が親密化する中、これらの親密性は、半自立・半依存状態にある成人生成期の娘の自立の支えと

なっていることが示唆された。そして、そうした重要な関係であるからこそ、そこからの離れ難さから自立が抑制されるという側面をも有しており、娘に自立と依存の葛藤を生起させているのではないかと考えられた。

量的な実証研究で示した２つの精神的自立のプロセスの内、母親との信頼関係が高いままに関係性が推移して行くプロセスについて、娘の語りを分析してみると、母親との間で維持される絶対的安心感は、母親への信頼感を高め、許容期待（杉村他、2007）を育み、率直なやりとりのプロセスで母親が娘を対等な存在と認めるようになるという変化を引き出して相互的に対等な関係を生み出すという意味で、娘の適応的な自立のプロセスを支えるよう働いているのではないかと考えられた。このように、母親と密接に関わりながら適応的に自立して行くプロセスでは、密着とされるような母親への親密性は、娘にその密着的な関係が依存であるという「気づき」をもたらすことで、その関係性を自立的に変化させるような契機を提供してもいると推測された。すなわち、母と娘の密着的な関係が維持されていても、社会的に自立が強く意識される時期であることや、親との関係を多面的視点からみることができるようになるという認知・社会性の発達を基盤とした関係性の捉え直しが生じることで、娘にはその関係性を自立的に変化させて行こうとする欲求が高まるのではないかと考えられた。そして自立欲求が高まると、母親との間に維持され育まれる親密性による母親からの「離れ難さ」との間で、娘には葛藤が生じる様子が認められた。こうした葛藤は、一時的に娘の適応を低下させるように見えたが、その葛藤を主体的に解消して行こうとするプロセスで、娘はその親密性を低下させるのではなく、それを土台として新たな関係を生み出す様子が見られ、こうした動きは、母親から信頼され得る対等な個としての自己を築いたという自信を高めるよう働いていると推測された。子は自立とともに、親から守られ支援される立場から、親に頼られる立場へと推移して、親と「対等な関係」を築くとされる（落合・佐藤、1996）。しかし、本研究の娘の語りからは、娘たちは自立のプロセスにおいて母親から安心感を与えられ、母親の価値観に捉われ続けており、横断研究の結果からは成人生成期を通してそうした関係は維持されると推測され、親子間の立場の逆転と言えるような変化は生じないと考えられた。現代の成人生成期女性における母親との自立的な関係は、母親との親密な関係において自立欲求が高まることで葛藤を抱えながらも、その親密性を低下させるのではなく、維持し成熟させていく方向に葛藤を解消し、互恵的な関係を築くことで、形成されるのではないかと推察される。こうしたプロセスは、母親との関係において「関係性の中の

自己」（Kaplan & Klein, 1991；Miller, 1986）を築くとされる女性モデルでの自立のプロセスを支持するものであり、現代の成人生成期の娘が、母親との密着的関係を維持し成熟させながら、いかにして自己を紡ぎ出しているのかを示唆するものである。

一方で、母親への絶対的安心感が低い中で、信頼関係が低いままに心理的に分離して行くプロセスも示された。娘の語りからは、そのプロセスでは情緒的欲求が満たされないことによる葛藤が生じ、娘は母親との間に距離を置きながら独立的に母親から信頼され得る自己を築いて自立しているのではないかと考えられた。こうした一方的な関係性の変化は、回避的葛藤解消方略（Fuhrman & Holmbeck, 1995）と考えられ、その葛藤は、たとえ解消されたように見えても潜在化されるにとどまると推測された。このように、母親への情緒的欲求が満たされないことによる葛藤は解消が難しく、こうした葛藤が高じた場合には、娘の自信や精神的安定の低下といった適応の問題から、心理臨床的問題（信田、2008）に繋がることも予期された。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、研究目的に沿い、首都圏の大学に通う未婚女性を対象とした調査に基づいている。さらに、調査への協力を得られたことからは、対象者は比較的葛藤の少ない母娘関係にあると推測される。こうしたことから、本研究の結果に、対象者の偏りによる影響が生じている可能性を否定することはできない。さらに、親子関係は、母娘だけを取り出して捉えるのでは不十分であり、家族をシステムとして捉える視点が必要である。母親との同居・非同居、地域・経済的要因もその関係性に影響を与えるであろう。しかし本研究では、母親との親密な関係が娘の自立にどのような影響を与えるのかについて、娘の内面での心情的ダイナミクスを明らかにすることを目的に、母親と娘という二者関係のみに焦点を当てたために、このような要因については検討することをしなかった。これらの背景的要因も含めた母娘関係の発達的推移のメカニズム検討は、今後の課題としたい。

本研究では、親密性の精神的自立への関わりおよび精神的自立の２つのプロセスを量的な実証研究で示し、これらでは十分明らかにできなかった娘の内面で生じる心の動きを、PAC 分析の手法を用いて紐解いていった。質的研究で示した母娘関係の発達的推移のプロセスを解明するための仮説については、プロトタイプとして取り上げた対象者の数の制約より、結果の一般化は慎重にする必要があり、今後さらに検証して行く必要がある。２つの精神的自立のプロセスを予測した縦断的研究も、１年の間

を置いた短期のものであり、成人生成期の後半については、横断調査を行うことでの予測にとどまった。継続的な縦断調査により、成人生成期に渡る母娘関係の発達プロセスを追う必要がある。

審 査 の 結 果 の 要 旨

水本氏の論文は、青年期から成人期への移行期にある女性が、それまでの母親との関係を変化させ、どのようにして精神的自立を進め、母親との対等なおとな同士としての関係を築いていくか、そのプロセスを生涯発達の見地から明らかにしようとしたものである。氏は、とくに現代の我が国における母娘関係の特性として指摘される母娘の間の親密性の高さに着目し、母娘の関係性の変化における親密性の役割について、自立への影響という視点から明らかにした。

現代の先進国では青年期から成人期への移行期が長期化していると指摘され、「成人生成期」という発達段階が提唱されているが、氏の研究ではこの時期の自立の問題を取り上げている。審議ではまず、この時期の自立を検討するにあたり、日本の大学生の自立を取り上げることの意義についての討議がなされた。成人生成期とされるこの時期の親子の関係には文化差が存在し、日本では欧米に比べ経済的・物理的に親との距離が近い一見移行期に至らない状況に見えるが、実際には日本の大学生は内的に自立への模索・葛藤を続けている時期であることを確認し、この研究が成人生成期における我が国独自の自立の様相を明らかにしたものであることを確認、評価した。

次いで、氏の研究では、従来青年期の自立研究が、子どもは親との対立を経て親から心理的に分離し、独自の自己を築くとしてきたのに対し、子の自立は親からの分離によって終わるのではなく、一生続く親との関係のなかで親との間に対等な関係を築くことが成人生成期における自立であるとする立場に立つ。この立場から、氏は従来の自立を測定する尺度ではなく、新たに「母子関係における精神的自立尺度」を作成した。この新たな尺度の作成により、母親との間に対等な関係が築かれていくプロセスでは、母親からの「心理的分離」だけではなく、母親との「信頼関係」という新たな基軸があることを示し、これが娘の自立過程における精神的適応感とかかわることを指摘した。この知見は、親からの自立では、親からの分離だけではなく親との関係性が重要であることを示したものであり、発達心理学上の意義あるものと評価できる。同時に、自立期における母親との関係性が娘の適応にかかわる重要な側面である

ことを明らかにしたことは、臨床心理学への貢献としての意味をもつものと考えられた。

氏の論文のもうひとつのテーマは、この時期における母親と娘の間にある親密性のありようとその自立への影響である。氏は、これを明らかにするために「母親への親密性尺度」を作成し、これまで「密着」とされてきた母親への親密性は、質的に異なる３種の親密性（母親への「心づかい」、母親の価値観への「捉われ」、母親への「絶対的安心感」）よりなり、それぞれ自立に異なる役割を果たすことを明らかにした。これはこれまでにない知見である。

このような「自立」の新たな枠組み、母親への「親密性」の内容を明らかにしたのち、氏の研究は横断研究と縦断研究による母娘関係の発達的推移の検討へと展開している。ここではまず「親密性」の発達的推移に関し、現代の娘では成人生成期を通して母親の価値観への「捉われ」と母親への「絶対的安心感」が低下しないまま維持されていることを示し、「密着」とされる社会的現象が母親への依存的な親密性が維持されることで形成されていることを示した。さらに、自立の２側面の発達的推移を検討し、成人生成期を通して母親との高い信頼関係にある娘がそれを維持したまま適応的に心理的に分離していくルート（第１のルート）と、母親との信頼関係の低い娘が信頼関係が低いまま心理的に分離していき、その後母親との信頼関係を高めていく比較的適応感の低いルート（第２のルート）が存在することを示し、この２つのルートでは母親への「絶対的安心感」の高低に違いがあり、それにより異なる対等な関係を構築していくという２つの自立のプロセスモデルを提起した。自立プロセスが母親との信頼関係の高低により異なるルートをたどり、それに母親への「絶対的安心感」が関与するというこの知見は、母親との結びつきのあり方が娘の自立のプロセスに大きく関与し、両者がおとな同士の関係に向けて対等な関係を築いていくプロセスに大きな影響を与えるという、成人生成期に特有な母娘間の関係性の発達プロセスを実証的に明らかにしたものとして高く評価できる。またこの結果は、自立のプロセスには性差があり、女性は「関係性の中で自己を築く」とされる自立における女性モデルの検証としての意味も有し、生涯発達心理学における自立研究に大きな貢献をなした。

さらに、氏の研究では、これらの２つのルートに関し、個人内で親密性が精神的自立にどのように作用し、関係性がどのように変化しているかを明らかにするために、２回の経年的面接調査での娘の「語り」から分析を行った（PAC 分析）。この質的分析は、個別的分析でなければわからない側面を含む量的研究により得られた結果の確

認であるとともに、限られたサンプルの個別的分析であることから、論文中では母娘関係の発達的推移のプロセスの仮説生成の試みと位置づけられるものである。この検討を通して、氏は先に量的研究により示した３つの親密性にはそれぞれ娘の自立を抑制・促進する両面が併存し、「密着」とされる依存的な親密性であってもネガティブな影響だけではなく半自立・半依存状態にある成人生成期の娘の自立の支えになっていることを読み解き、さらに、先に提示した２つの自立のプロセスモデルにおける変化の機序について、密着とされるような母親への親密性は、娘にそのような関係が依存であるという「気づき」をもたらすことが娘の変化の契機として作用していること、さらに母親との間にある「絶対的安心感」は、それによる許容期待が相互的な関係性の変化を進める要因として働いていることを論じている。このような量的研究で明らかにされた知見について質的研究により変化の機序にまで踏み込んだ分析を行って得られた内容は、仮説生成にとどまるものであっても、本論の独自性と発展性を構成する部分として評価されるべきものと捉えられ、同時に今後の自立発達研究への大きな示唆を与えるものと考えられる。今後は、本論文で示唆された仮説の検証と母娘両者の変化を生む動因となるもののさらなる解明が期待される。

以上、先行研究を十分吟味した上で先行研究以上の新たな独自の知見を示していること、また研究のための新たな尺度開発を行うとともに多種の研究方法を組み合わせた独自性のある研究方法を採用していること、今後の研究への十分な発展性を備えていること、以上を総合的に評価し、審査員一同は全員一致で水本氏の論文が博士の学位を授与されるにふさわしい論文であると判断する。